



小さい頃から仲間とともにキャンプや自然の中での活動に親しんできた小山潤也さん。高校卒業後の進路を真剣に考えていた昨年3月、未曾有の大災害が発生した。その時、小山さんの身体は自然に東北に向いていた。

当たり前が当たり前でなくなった日

2011年3月11日 14時46分 東日本大震災発生。あの日のことは、皆さんも鮮明に覚えているのではないだろうか。尋常ではない揺れ。時や日を追うごとにメディアを通して見えてくる被災地の惨状。交通・通信網の乱れ。原発や放射能への恐怖。計画停電や燃料の不足など、今まで当たり前であったものが、あっという間に当たり前でなくなってしまった。日々の生活が変わったのは自分だけではないと思う。

震災直後多くの方が水や食糧の備蓄をしたと思う。しかし、今はどうだろうか？災害用伝言ダイヤルの番号や使い方を覚えているだろうか？今、普通に電気が使え、ガソリンがあり、お店には商品が陳列されている。しかし、これが当たり前ではなかったことを思い出してほしい。今が当たり前だと思ってしまうたら、東日本大震災は我々にとって対岸の火事になってしまう。

今、私たちの中で風化、慣れ始めているのは確実だ。当たり前は、今この瞬間にも当たり前ではなくなるかもということを知り共有し、考え、話し合う必要が今あるのではないだろうか。

自分にできることをしよう！

3月11日テレビの画面に映る映像に、自分は啞然として、テレビの前で固まり、気が付くと震え涙があふれ出ていた。テレビが映していたのは必死で逃げ惑う人々や、見たこともないような黒い津波が町を破壊していく様子だった。そんな映像を見ていて恐怖と心配の気持ちの反面、群馬という土地柄ゆえにホッとしている自分もいた。その時思った。「自分は生きている。自分にできることをしなくては」と…。

まずはtwitterなどのSNSやgoogleの提供していたPerson Finder(消息情報)を利用して様々な情報の発信・収集を試みた。東北への情報はもちろん、東京や横浜で大量に発生していた帰宅困難者への情報、また自分の周りへの今後の備えや情報をまとめたものをとにかく発信し続けた。

そして、そんなことをしているうちに、もういてもたってもいられなくなってきたのだ。

「まだ早い！まだ来るな！！」

震災後しばらく経つと、メディアがボランティアについての報道を始めた。しかし、その内容はどれも「まだボランティアが行くには早い」「まだボランティアは来ないでくれ」という内容ばかりだった。それに自分は猛烈に違和感を感じた。「ボランティアが行くにはまだ早いわってなんだ？まだ来るな？」意味が分からなかった。「被災地があって被災者の方がそこにおいて、避難生活を送っていて、それでもやることがないとでもいうのか？」

と疑問符だらけだった。確かに震災直後は我々一般市民が行っても様々な妨げになってしまうことは理解している。しかし、1週間経っても、2週間経っても同じようなことばかり言っていた。今思うと、それは行政側の意見だったのだ。今回は行政機関も被災してしまい、受け入れ態勢が整わないから来られても困るということだったのだ。混乱を避けるためには仕方ないのかとも思うが、やはり疑問と違和感は拭えない。

被災地に行くこと決めた

「被災地ではマンパワーが絶対的に足りない」「物はある。しかし、それを捌く人が足りない」という被災地からの声を twitter 経由で見つけた。このつぶやきを見て自分は行くことを決めた。しかし、いざ行こうとすると様々な障壁にぶつかった。身の安全の問題、食糧・水・ガソリンの確保といった問題は大きかった。「もしまた原発が爆発したら…もしまた地震が来て津波が来たら」と考え始め、「買い溜めはやめましょう」と言っている中、2週間分もの食糧やガソリンを買い占めてボランティアに行くのって矛盾してないだろうかなど葛藤があった。それでも、行くこと決めたのは被災地からの声が twitter を通して聞こえてきたからだと思う。だが、行くことができたのは4月の初めのことだった。

石巻市と南三陸町でのこと

自分は宮城県石巻市と南三陸町の2か所へ行き約2週間ボランティア活動をした。まず石巻市のボランティアセンター（以下V. C）行き登録を済ませた。すると「すみません。今、やることがないのでお待ちいただけますか」と言われた。自分は意味が分からなかった。「なぜ？なぜやることがないのだ？」とここでも疑問を感じた。しかし、これも行政やV. Cの仕組みとして、どうに



もできないものだった。自分は、「待っていることなどできない」と思い町へ出て行った。これも行政の提示するマニュアルに反した行動であった。しかし、間違ったことはしていないと思っている。「やることがないというなら、自分からやることを探しに行けばいい」。そう思ったからだ。

石巻市での活動は主にながれきの撤去と泥かき、家の中の片づけだった。自分の身長と同じくらいの高さがあるながれきの山。20センチも積もった泥。それも重油やヘドロ、様々なものを含んだ泥は重く、臭いもひどかった。家の中の片づけでは、海水を含んで重くなった畳や家具を運び出したりした。片づけながら被災者と話をしていると辛い内容に及ぶこともあった…。

7日目から活動場所を南三陸町に移した。この町は、町の大半が津波により破壊されていた。活動は主に支援物資の仕分け、プレハブ住宅の組み立て、小学校の移転作業だった。支援物資の仕分けは、避難所にもなっていたベイサイドアリーナという大きな所でおこなった。支援物資が次から次へと届く。遠くは台湾やアメリカなどからも届いていた。本当にありがたい思いでいっぱいだった。しかし、その支援物資の仕分け作業をしている空間の4分の1が遺体安置所となっていたのだ。手前には生きるのに必要な支援物資があり、奥では遺体が家族との対面を待っている。生と死が一つの空間の中にあっただのだ。あの空気感は何とも言い難く決して忘れることはできない。

この経験をどう活かし、どう広げる？

この経験は自分の中でとても重要な体験となった。そして、その経験をどう活かし、どう広げ伝えていくか試行錯誤している。

最後に被災された方々へ心よりお見舞いを申し上げます。一日も早い復旧、復興、そして「復幸」を祈ります。